

報道関係各位

東京ミッドタウンマネジメント株式会社

才能あるデザイナーやアーティストの発掘・支援・コラボレーションを目指した
デザインとアートのコンペティション

「Tokyo Midtown Award 2018」結果発表

受賞作品展示：10月19日(金)～11月11日(日)

東京ミッドタウン(港区赤坂 / 事業者代表 三井不動産株式会社)は、「JAPAN VALUE(新しい日本の価値・感性・才能)」を創造・結集し、世界に発信し続ける街”をコンセプトに才能あるデザイナーやアーティストとの出会い、支援、コラボレーションを目指してデザインとアートの2部門でコンペティションを開催しています。

この度、「Tokyo Midtown Award 2018」において、計 1,290 点の応募作品の中からグランプリなど受賞作品が決定しました。

【Tokyo Midtown Award 2018 グランプリ受賞作品】

<デザインコンペ>

テーマ: HUMAN

作品名: 『黄金比箱』

受賞者: JDS



<アートコンペ>

テーマ: 応募者が自由に設定

作品名: 『息を建てる/都市を植える』

受賞者: 青沼優介



受賞した全 16 作品(デザインコンペのファイナリストを含む)は、10月19日(金)から11月11日(日)まで、東京ミッドタウンのプラザ B1 オープンスペースにて展示します。また、期間中、来街者の一般投票で人気作品を選出する「オーディエンス賞」も実施し、結果は 11 月中に東京ミッドタウン・公式サイトにて発表いたします。

■ 掲載時の一般の方のお問い合わせ先 ■

東京ミッドタウン・コールセンター

TEL : 03-3475-3100

東京ミッドタウン・公式サイト

<http://www.tokyo-midtown.com>

Tokyo Midtown Award 公式サイト

<http://www.tokyo-midtown.com/jp/award/>

※デザインコンペ、アートコンペの各受賞作品画像は、以下の URL よりダウンロードいただけます。

<http://www.tokyo-midtown.com/press/award.html#art>

<デザインコンペ>の今年のテーマは、「HUMAN」。技術の進化に伴い日々変わっていく世の中で、日々の暮らしを豊かにするアイデアや少しだけ先の未来を予感させるアイデアを募集しました。計 1,054 点の応募作品があり、10 点のファイナリスト作品の中から、グランプリなど各賞が選ばれました。

今年から 2 次審査(プレゼンテーション審査)が加わり、“デザイン力”、“提案(プレゼンテーション)力”、“テーマの理解力”、“受け手の意識(消費者ニーズの理解力)”、“実現化の可能性”を基準に審査。意匠権調査を経て、各賞が決定しました。

各受賞者には賞金が贈られるほか、副賞としてグランプリ受賞者を来春、国際家具見本市「ミラノサローネ」開催中にイタリア・ミラノへご招待します。また今後継続的に受賞作品の実現に向けたサポートを行う予定です。

■ グランプリ

受賞作: 『黄金比箱』

受賞者: JDS(広川楽馬、迫健太郎、中塩屋祥平)

<作品コンセプト>

人間が、本能的に美しさを感じると言われている比率「黄金比」を利用した弁当箱。仕切りを何枚入れても、常に黄金比のスペースが生まれ、品数が多いときもそうでないときも自然と美しく料理を盛り付けることができます。人類が長年愛してきた黄金比を、どうぞ一度めしあがれ。

<審査員講評>

人間が無意識のうちに美しいと感じてしまう黄金比率を、そのままお弁当箱にして食べる行為に結びつけた点が非常に面白いと思いました。「国籍を超えて全 HUMAN にいいねと言ってもらえるプロダクトを目指した」という出発点と、審査員それぞれに合わせたお弁当を作ってきたというプレゼンテーションもユニークでした。このプロダクトが商品化されて、みんなが自由に黄金比率を使ったお弁当を作って楽しんでいる様子を見たいです。

えぐちりか



■ 優秀賞

受賞作: 『SHADOW CLONE TECHNIQUE』

受賞者: 竹下早紀

<作品コンセプト>

影分身する椅子。人は光によってモノを捉えることができ、光のあるところに影が存在します。その影にモノと同じ機能を持たせました。一人でも使用でき、誰か来れば二脚に増やすことができます。椅子という人が座るための形。分身することで私と誰か、人と人だからこそ共有できる空気や時間があります。



■ 優秀賞

受賞作: 『NENKI-年記-』

受賞者: H&F(花井ゆうか、舟橋璃咲)

<作品コンセプト>

あらゆる生き物の中で、人間だけが「文字」を使って物事を書き記すことができます。毎日つける日記とは違い、年記は 1 年に 1 ページずつ、その年の特別な出来事を記していきます。山あり谷ありの長い人生を、全長 10m もの蛇腹折りで表現しました。ページを広げれば自分だけの年表の出来上り。生きてきた歴史をいつでも振り返ることができます。ロボットと違って忘れっぽい人間のための記録帳です。



■ 優秀賞

受賞作: 『肌羹』

受賞者: 仲野耕介

<作品コンセプト>

素材の餡の違いにより、人肌色のグラデーションとなっている羊羹です。色に境目はありません。人同士、肌の色が違って、色の移ろいを素材の個性として楽しみ、味わう。そのような前向きな関わりを持てれば、と思い制作しました。



<アートコンペ>では、テーマを応募者が自由に設定するものとし、東京ミッドタウンのパブリックスペースに設置することを意識したサイトスペシフィックな作品を募集しました。応募者自身が設置場所を選び、作品を提案できる自由がある一方で、商業施設に作品を置くパブリックアートとしての構築や自身のテーマを厳しく問われるコンペです。

応募のあった236作品の中から2次審査を通過した6名の入選者には、制作補助金100万円が支給され、実際に制作した作品を審査し、各賞が決定しました。

グランプリ受賞者は、副賞として University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History が実施するアートプログラムへ招聘されます。

■ グランプリ

受賞作: 『息を建てる/都市を植える』

受賞者: 青沼優介

<作品コメント>

都市は新陳代謝をしている。時間とともに景観は変化し、私たちの過ごす時間や場に変化を与えてきた。しかし、最初から都市と位置付けられた土地はない。建築を建て、壊しを繰り返しながら、膨張した結果である。

私は蒲公英の綿毛を植え、その新陳代謝を表現した。儂くも懸命に建つ最小の建築たち。ひいては都市である。壊れても、誰かが植えれば生まれ変わる。都市は誰のものでもなく、時間とともに更新され続けていくものなのだ。



<審査員 講評>

私が興味深かったことは、彼がタンポポを育てることから作品が始まっているということだ。日々観察し向き合い、些細なこともかもしれないことの中に可能性を見つけようとする姿勢は、変わらないように見える日常を新しい可能性へと導いてくれるかもしれない。震災や災害を経て私たちが次に想像しなければならない世界は、作品の向こう側に予感させてくれるように感じた。それは、構造絵を持つ空間が、柔軟に様々なものを受け入れ、しなやかに新陳代謝していくことを感じさせてくれる。

大巻伸嗣



■ 準グランプリ

受賞作: 『星圖』(せいず)

受賞者: 下村奈那

<作品コメント>

都市に眠っている夜空を、ここ東京ミッドタウンに出現させる。コンセプトは「意識への誘発」。都市の生活のなかで星空は見えるだろうか。

現代都市での生活では星空と共に生活している意識は薄れてしまった。大きなビル、大量の灯り、都市が星空を吸収している。この東京ミッドタウンで「星圖」を展示することは、都市が吸収している星空の存在を、人々の生活や意識に戻すことであると考えた。



<審査員 講評>

緊張感に満ちた深い直線、細く軽やかな曲線など、星と星の間に伸びる線の筆致に密度の濃い制作過程が感じとれた。日々の想いを描いたという線が見せる星図は、感性が鈍り気味な現代の我々に刺激をもたらし、問いも投げかける。静謐さに包まれた作品ながら、手がないうるアートの強さも滲みでて、はっとさせられる。下村さんの日常と遙か彼方の宇宙を結びながら、想像力を喚起する広がりのある世界を見せてくれた。実力を感じました。

川上典李子



※デザインコンペ、アートコンペの各賞およびファイナリストの詳細は別添資料をご確認ください

<デザインコンペ>概要

テーマ：「HUMAN」

応募期間：2018年7月2日(月)～7月30日(月)

審査方法：1次審査(書類審査)→2次審査(模型によるプレゼンテーション審査)

審査員：石上 純也 / 伊藤 直樹 / えぐち りか / 川村 元気 / 中村 有吾 以上5名

協力：東京ミッドタウン・デザインハブ、株式会社 JDN

賞(賞金)：グランプリ(1作品)----- 100万円

優秀賞(3作品)----- 各30万円

ファイナリスト(各6作品)---- 各5万円

応募総数：計1,054点

- グランプリ受賞者を毎年4月に開催される「ミラノサローネ国際家具見本市」開催中に、イタリア・ミラノへご招待いたします。(※1)
- 受賞後、実現化のサポートを行います。
- 2018年は審査の結果、既存の賞に加えて、作家の将来性に期待して授与される賞として「審査員特別賞」が設けられました。

※1 毎年4月に開催される「Salone del Mobile Milano / ミラノサローネ国際家具見本市」。世界最大規模の家具見本市として開催される「ミラノサローネ」は、デザイナーが自身の作品を発表できる展示場「サローネサテリテ」が設けられ、若手デザイナーの登竜門的な場所としても知られています。

<アートコンペ>概要

テーマ：応募者が自由に設定

応募期間：2018年5月24日(木)～6月14日(木)

審査方法：1次審査(書類審査)→2次審査(模型によるプレゼンテーション審査)→最終審査

審査員：大巻 伸嗣 / 金島 隆弘 / 川上 典李子 / 鈴木 康広 / スツツニ子! 以上5名

協力：一般社団法人ノマドプロダクション

後援：University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History

賞(賞金)：グランプリ(1作品)----- 100万円

準グランプリ(1作品) ----- 50万円

優秀賞(4作品) ----- 10万円

応募総数：236点(※3)

- 別途、入選者1人、または1組につき、制作補助金100万円を支給いたします。
- グランプリ受賞者は、University of Hawai'i at Mānoa の Department of Art and Art History が実施するアートプログラムに招聘いたします。(※1)
- 入賞者6名は来春の「ストリートミュージアム」に参加(※2)
- 2018年は審査の結果、既存の賞に加えて、作家の将来性に期待して授与される賞として「審査員特別賞」が設けられました。

※1 University of Hawai'i at Mānoa / Department of Art and Art History について

歴史ある本プログラムは、これまで数多くのアーティストや学者が招かれ、ハワイの芸術文化に触れながら、各種のアートプログラムを行っています。受賞者には、実際にハワイに滞在し、ハワイ大学のアートプログラムに参加しながら作品を制作する機会が与えられます。

※2 東京ミッドタウンが春のイベントの中で開催する「ストリートミュージアム」(2019年初春予定)での作品展示の機会が与えられ、新作の発表の場として活用できます。また、ワークショップなどの開催も予定しています。

※3 応募は1人(または1組)1作品案まで

＜デザインコンペ＞



©junyaisigami+associates

石上純也
建築家

今回のアワードでは2次審査が行われ、実際のプレゼンテーションや模型を見られたのが良かった。1次審査で印象が良い提案は選べたと思うが、はっきりとしたことはわからなかった。2次審査で実現性や発展性がよくわかった。選出作品はどの審査員も評価しており、普遍的な作品が選べたと思っている。限られた数の作品を選ぶため、このように順序がついたが、ファイナリストに選ばれた作品はどれもすばらしいと感じている。また、すべての作品に言えることかもしれないけれど「HUMAN」というテーマに無理やり意味をこじつけるようなところも強く感じ、その事によって、よくなるならいいのだが、結果、作品の純粋性が弱められているように感じた。HUMAN という根本的なお題は、そのタイトル自体に意味があるのではなく、人間が利用するものすべてに対する根本的な問いかけだということを深いレベルで考えてほしいと思った。

伊藤直樹
クリエイティブディレクター

今回は2次審査が新設されたため、「1次審査を通過したらブラッシュアップしよう」とお考えの方も実は多かったのではないのでしょうか。その分、1次審査は正直ちょっと心配になりましたが、2次審査でホッとしました。予想どおり、相当ブラッシュアップされていました。プレゼンで人が見られたことも大きかったです。最終的に総合的なポテンシャルの高いものが揃い、「やっぱり Tokyo Midtown Award はなんかステキ。」と感じました。

えぐちりか
アーティスト/アートディレクター

応募作品はユニークな提案が多く、全作品を見る1次審査はとても楽しんで取り組みました。ただ、Tokyo Midtown Award が他のアワードと違うのは「実現性」。実現性を考えるとあと一歩の作品が多く、ユニークさのなかにニーズが考えられている、実現力ある提案に出会うのは難しいと思いました。

1次審査で選んだ10作品には多少の不安がありましたが、今年から始まった2次審査ではどの方のプレゼンも模型も上手くて素晴らしかったです。最終的に、文句なしに実力のある提案を選んでよかったし、選ばれなかった中にも、クリエイターとして、今後の活躍が楽しみな“人”に出会えたことが収穫でした。

川村元気
映画プロデューサー/小説家

応募作品はテーマ「HUMAN」と密接な提案が多い印象でしたが、最終的に選ばれたものはどれも「HUMAN」に対して、どこかちょっと距離があるものでした。グランプリ、優秀賞に選ばれた作品はいずれも人間的な“物語”を背負ったものが選ばれたと感じています。HUMAN＝人間を深く考えると物語が生まれ、そこから新しいデザインが發明されるというプロセスが興味深かったです。どう商品化されていくのかを楽しみにしたいと思います。

中村勇吾
インターフェースデザイナー

Tokyo Midtown Award 2018 デザインコンペのテーマ「HUMAN」には、“テクノロジーが発展した現代において、人間——HUMAN をあらためて見つめたとき、どうなるか？”という問いがあったかと思います。直接それに答える提案も多かったのだけど、最終的に選ばれた提案は普遍的な人間の特徴をひろいあげたものが多く、興味深く審査しました。受賞した提案はテーマに対する何らかの回答であり、時代性を持っているようにも感じるし、普遍的なようにも感じます。

<アートコンペ>



©Katsuhiko Ichikawa

大巻伸嗣
アーティスト

各ファイナリストは2次審査のアドバイスを踏まえ、プランを発展させた成果を見せてくれました。ポジティブなエネルギーや、人間性を感じる作家が多かったです。商業施設での展示のために生じる、素材やサイズなどの制約に直面しながらも、いかに作品化するかを学ぶ機会にもなったのではないのでしょうか。なかでもグランプリと準グランプリの作品はクオリティが高く、個人の奥底にある問題意識が提示されていました。今後に期待しています。



金島隆弘
アートプロデューサー/
芸術学研究者

グランプリ、準グランプリに選ばれた作品には、素材や手段は違えども、自分にとって身近なものや感覚を、いかに社会に伝えるかを考え、作品にする姿勢が感じられました。そこが良かったと思います。また審査の過程をとおして、若い世代が今何を考えているか、改めて感じる機会にもなりました。審査員の皆さまとは長時間にわたり議論を重ねましたが、それぞれの視点から刺激をもらい、自分の考え方もほぐれていくような楽しい時間でした。



photo by Takasaki Koshiba

川上典李子
ジャーナリスト/
21_21 DESIGN SIGHT
アソシエイトディレクター

繊細な作品が放つ強いメッセージや、親しみやすい作品に潜む社会への問いなど、ファイナリストの多様な視点を知る力作揃いでした。当初の提案になかった挑戦もなされるなか、心に響き、想像力が刺激される作品を各賞に選出できました。共に、手を動かすアートの強靭さに満ちた意欲作です。他の皆さんからも今の時代に向かって向きあおうとする姿勢が伝わってきます。今回の経験を生かし、今後更に思い切った挑戦を見せてくれる可能性を感じました。



courtesy: The Japan Foundation

鈴木康広
アーティスト/
武蔵野美術大学准教授/
東京大学先端科学技術研究センター
客員研究員

ファイナリストの皆さんの「やり切った」感じが伝わり、頼もしかったです。審査の過程では、東京ミッドタウンという場で応募者の可能性やポテンシャルを、いかに萌芽させられるか、応募者と審査員と一緒に考える場をいかにつくれるか、といったことを考えながら審査をしました。考え方を柔らかく変えていける可能性を感じる青沼さんと、アスリートのように作品を研ぎ澄ませていく下村さん、対照的な二人が選ばれて興味深かったです。



photo by Mami Arai

スブツニ子！
アーティスト/
東京大学RCAデザインラボ
特任准教授

「世界の捉え方の多様性」に気づかされるのがアートの面白さです。東京ミッドタウンに足を運ぶ人たちの中には、日本社会の中での日々の生活に生きづらさや息苦しさをを感じる瞬間もあると思うのですが、そういったときに、アートに触れて「こういう世界もある」「こんな形で生きることができる」と考えるきっかけをつくる作品が選ばれました。自由に生きていい、ということ今年を受賞作品を通して感じていただけたらと思います。

トロフィー

「Tokyo Midtown Award」では、毎年審査員の中から1名がオリジナルのトロフィーのデザインを手がけています。

今年度は、アートコンペ審査員の鈴木康広氏が制作しました。

「常に揺れ動く現実の世界に向き合い、自らの内なるリズムに耳を澄ます。受賞者はこれを勢みにクリエイターとしてそこに立つ勇気が増すことでしょう。自分自身を見つめるための『メトロノームの鏡』をトロフィーとしてデザインしました」

鈴木康広



東京ミッドタウン・オーディエンス賞

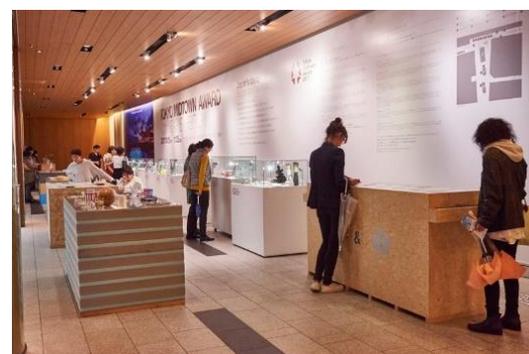
10月19日(金)の授賞式にて発表する<デザインコンペ><アートコンペ>の受賞作品は、10月19日(金)～11月11日(日)まで東京ミッドタウン・プラザ B1 オープンスペースにて展示されます。

また、期間中、来場者の一般人気投票を実施し、「東京ミッドタウン・オーディエンス賞」を決定します。

結果は11月中旬に東京ミッドタウン・公式サイトにて発表いたします。

これまでの受賞作は Tokyo Midtown Award 公式サイトで
ご覧いただけます。

<http://www.tokyo-midtown.com/jp/award/result/>



▲昨年の投票の様子

受賞作品が新たに商品化【東京はしおき】発売

『TOKYO』をテーマに開催した「Tokyo Midtown Award 2017 デザインコンペ」で計1,162点の応募の中から優秀賞に輝いた「東京はしおき」。

東京という都市の成熟は、多くの川が流れ込む地形と、江戸時代より人の往来を繋ぐ大小さまざまな数千の橋に支えられてきました。そんな文化的象徴としての「橋」をモチーフにつくられた「はしおき」です。「東京はしおき」は、東京という街を思い起こさせるアイテムであるだけでなく、「橋＝人と人を繋ぐもの」ということから心のこもった贈り物としても最適であるため、新しい東京土産の定番として中川政七商店での商品化に繋がりました。

桐箱の蓋を開けると、東京を代表する<日本橋><吾妻橋><永代橋><勝鬨橋><レインボーブリッジ>の5種類が川に見立てたパッケージの上に並んでいます。

「東京はしおき」1セット(5個入り) 4,000円(税抜)

【デザイン】本山拓人／不破健男

【販売店舗】中川政七商店街 東京ミッドタウン店ほか、以下店舗
<日本市>日本橋高島屋 S.C.店/ecute 東京店/羽田空港
第2ターミナル店/東京スカイツリータウン・ソラマチ店
<中川政七商店>東京本店/表参道店/GINZA SIX 店/コレド
室町店/ルミネ新宿店



▲東京はしおき